

中学生における無気力感改善要因の検討

牧 郁子 (Ikuko Maki)

指導：野村 忍

【問題と目的】

小学生から中学生への移行期は、身体が急激に発達し生物的变化が著しく、また学習内容の難化・友人関係の複雑化といった環境的变化も経験する、ストレスフルな時期であるといえる。それにも関わらずこの時期の子どもは、コーピング・スキルの乏しさからこうした急激な変化が心配や混乱に結びつきやすく (Schinke, chilling, Snow, 1987)、また行動と結果の随伴性判断がより現実的になることから、主観的なコントロール感が減少することが指摘されている (鎌原・樋口, 1987; Weisz & Stipek, 1982)。このように中学生は、内面的にも環境的にもストレスフルな状況に置かれやすいにも関わらず、行動に対する成果が実感されない経験が蓄積されやすく、自己や環境に対するコントロール感を失い、無力感に陥りやすい時期であるといえる。こうした環境からの応答性の欠如という状況は、無気力感の説明理論である学習性無力感理論 (Seligman & Maier, 1967) における、自身の行為で結果をコントロールできない非随伴的状况であるといえる (水口, 1993)。こうしたことから本研究では、自分の行動と結果が随伴しているかどうかについての認知である随伴性認知 (Seligman & Maier, 1967) を主軸概念として取り上げ、無気力感に関連するコントロール感理論・抑うつ認知理論も参照しながら、中学生の無気力感を構成する要因を検討し、その改善要因を同定することを目的とした。

【研究】

無気力感を構成する変数尺度の作成、および信頼性・妥当性の検討

中学生における無気力感構造の検討に役立てるため、中学生における主観的随伴性を測定する主観的随伴経験尺度 (随伴経験・非随伴経験からなる 2 因子)、中学生におけるストレス事態での対処行動への自信を測定するコーピング・エフィカシー尺度 (勉強におけるコーピング・エフィカシー、友人関係でのコーピング・エフィカシー、教師との関係におけるコーピング・エフィカシーの 3 因子)、中学生における推論の誤りを測定する思考の偏り尺度 (教師への偏った思考、勉強における偏った思考、友人関係における偏った思考、自己への偏った思考の 4 因子) をそれぞれ作成し、その信頼性・妥当性を検討、実証した。

中学生における無気力感要因の同定、およびその関係性の検討

作成した測定尺度を用いて、中学生における無気力感要因の同定、およびその関係性の検討を行った。まず主観的随伴経験が中学生に与える影響を検討するため、不登校の中学生と登校している中学生との随伴経験・非随伴経験の違いを検証したところ、どちらの群にも有意差が認められなかった。このことから、自分の行動で結果をコントロールできたという随伴経験においても、自分の行動で結果をコントロールできなかったという非随伴経験においても、主観的には経験している程度に差があるとはいえないことが明らかになった。この結果から、登校している生徒たちも不登校の生徒たちと同程度に「随伴経験の欠如」や「非随伴経験の多さ」などを抱えている可能性が示唆された。こうした結果を受けて、登校している中学生への学校不適応行動の予防的観点から、「随伴経験の欠如」や「非随伴経験の多さ」が中学生一般の無気力感に及ぼす影響を検討するため、登校している中学生の観察された無気力感傾向とその生徒の主観的な随伴経験との関連を検討した。その結果、担任教師によって無気力感傾向が高いと評定された生徒の方が低いと評定された生徒よりも、随伴経験得点が有意に低いことが認められた。この結果から、中学生の無気力感とは「やってもうまくいかない」といった非随伴経験の多さというよりも、「やってみたらうまくいった」といった随伴経験の少なさに起因する可能性が示され、非随伴経験が無気力感を生み出すという従来の LH 理論に加えて、随伴経験の少なさからも無気力感が生み出されることが明らかにされた。そして無気力感を構成する要因を同定するため分析を進めた結果、随伴経験、非随伴経験 (time1) → コーピング・エフィカシー、思考の偏り各下位因子 (time2) → 無気力感 (time3) といった時間的流れの妥当性が示唆された。また随伴経験、非随伴経験、コーピング・エフィカシー、勉強における偏った思考、友人関係での偏った思考は、将来の無気力感と直接的に関与している可能性が示され、有意な値が得られなかった教師への偏った思考と自己への偏った思考においては、媒介変数を経て間接的に無気力感に関与している可能性が示唆された。

中学生の無気力感モデルの構築と妥当性の検討

無気力感構成要因の同定とその関係性の検討と先行研究とを参照して、中学生における無気力感モデルの構築を試みた (Fig.1)。その結果、随伴経験 (time1) → コーピング・エフィカシー (time2) → 無気力感 (time4) といった経路と、非随伴経験 (time1) から教師・友人関係・自己への偏った思考 (time2) が形成され、その影響が勉強における思考の偏り (time3) に収斂して直接将来の無気力感 (time4) に結びつく経路と、友人関係での偏った思考 (time2) から直接将来の無気力感 (time4) に結びつく経路とが確認された。加えて教師・友人・自己といった偏った思考 (time2) においては、無気力感 (time4) への間接効果が認められた。さらに、コーピング・エフィカシー (time2) から教師への偏った思考 (time2)・勉強における偏った思考 (time3) へと負のパスも改めて確認された。そして随伴経験・非随伴経験 (time1) が間接的にだけでなく直接的にも将来の無気力感 (time4) に関係していることが確認された。また無気力感への総合効果を検討したところ、随伴経験とコーピング・エフィカシーが、将来の無気力感への負の効果が高い結果となった。

中学生における無気力感改善要因の検討—介入研究を通じての検討

随伴経験とコーピング・エフィカシーが無気力感軽減に重要な影響を与えていることが明らかになったことから、随伴経験を通じたコーピング・エフィカシー増加のための介入を行いその効果検討を行った。まず個別形式の「中学生用・随伴性強化プログラム」を無気力感の高い中学生1

く研究では、教員を生徒の行動に対する環境からの随伴性に関与する存在と捉え、教師を通じた随伴的介入を前提とした「中学生のための無気力感予防・対処マニュアル」を作成し、無気力感が高いと行動評定された中学生1名を対象に、3ヶ月間教育相談担当教諭を通じて実施した。その結果、勉強・友人関係・自己における各偏った思考において得点が減少し、勉強・友人関係・教師との関係における各コーピング・エフィカシーで得点が増加した。以上のことから、教師からの随伴的関わりがコーピング・エフィカシーを高め思考の偏りを改善することが示され、随伴経験とコーピング・エフィカシーが、中学生の無気力感改善要因として効果が期待される可能性が示唆された。

【総合的考察】

本研究の結果、随伴経験とコーピング・エフィカシーが中学生の無気力感改善要因である可能性が確認され、また「随伴的環境としての教員対応のあり方」が生徒のコーピング・エフィカシーを高め思考の偏りを改善する可能性も示された。このことは、エビデンスに基づいた無気力感改善への成果と考えられる。今後は教職員が生徒にとって随伴的環境であり続けられるような、コンサルテーション効果のある介入プログラムおよびマニュアル開発が望まれる。

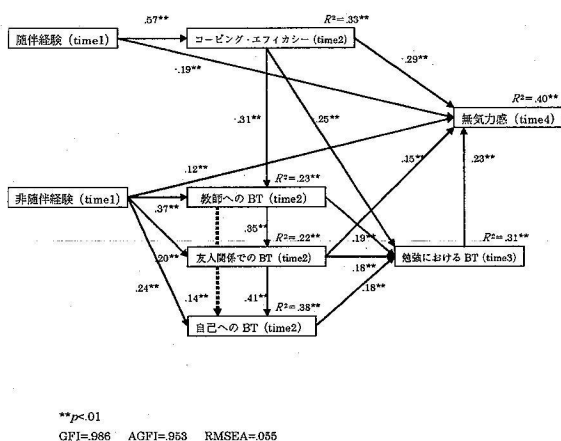


Fig.1 中学生の無気力感モデルのパス解析結果 (N=456)

名に約1週間あまり実施した。その結果、状態的なストレス反応は減少したものの随伴経験およびコーピング・エフィカシー得点には効果が見られなかった。この結果から、生徒自身の行動を変容させて環境からの随伴性を変化させるだけでは難しい点もある可能性が考えられた。そこで続